

神戸の西洋館

文＝黒沢 清
Kurosawa Kiyoshi

画＝浅妻健司

高校までしか神戸にいなかったから僕の記憶もずい分と古いところで止まっているのだが、1970年代半ばまでの神戸の街の風情を振り返ってみると、あちこちにごく普通に西洋の館が建っていたように思う。生まれた灘区の団地の向かいはキリスト教系の神学校で、その庭園は遊び仲間たちの格好の探検場所だったし、小学校は芦屋なのだが、通学途中の坂道に厳めしい石造りの邸宅があり（これは今もある）、学童たちが通ると決まって塀の上からシェパードがワンワン吠えてきて肝を冷やした。中高の通学は阪急電車で、車窓から毎日のように住吉川上流の山麓にそびえる恐ろしい気なヘルマン屋敷の廃墟が見えた。それが特に目立っていたわけではなく、そこにあるのが当たり前で、僕は当時とりわけ西洋館マニアではなかったから、近づいていちいちその建物の細部を観察していない（してあげばよかったと今はちょっと後悔している）。

東京に出て映画を撮るようになってからだろう、ロケ場所に適した西洋館はないかしらと探し出すと、これがほぼない。あってもそれは綺

麗に保存されていて、とても映画撮影に使わせてくれるような場所ではない。それである時、神戸にはそんなのがいくらでもあったと思い出して、一度そういう目で神戸の街を見てまわったことがある。ちょうどバブル期だ。灘区の神学校もヘルマン屋敷も既に跡形もなく、芦屋の邸宅は文化財として厳重に保存されていた。それどころか、昔よく行った三宮北側の洋館が立ち並ぶ通りは、異人館とかいうふれこみで一大観光地になっていて物凄く驚いた記憶がある。

まあ、それはそうだろう。こっちだって映画のロケ場所として非日常の空間を望んでいるわけ、日本全国どこでも西洋館は物珍しく目をひくのである。でも、どうして昔は全然気にも留めなかったのか。その理由はかつて自分も幼く、西洋館のありがたみに気が付かなかったというのもあるが、それ以上に、当時の街並みは日本家屋でもビルでも工場でもどれも規格外れだったというのがあってではないか。つまり、空襲による破壊から復興した街にはそもそも規格というものがなく、実に出鱈目な建造物がそ

こかしこにあったのだ。増築に増築を重ねた奇怪な家とか、装飾なのか機能なのかよくわからないデコボコがあちこちに突き出た集合住宅（我が家もそうだった）とか。あと、よく覚えているのは団地の屋上からいつも見えていた海沿いの巨大な製鉄所。あれは異様だった。その中に日本の建築とはまったく異質の構造を持った西洋館が混じっていても特に何の違和感もなかったわけだ。

ただ、ある時から街も住宅地も厳しい規格によって統制されることになる。神戸の場合、震災がそれに拍車を掛けた。当然だと思ふ。防災、景観、日照権や容積率やら何やら、人々が安心して快適に住まうていくためにはどれも必要不可欠なことだ。そうした中で、規格外れのもの撤去されるか、さもなければ文化財として保存されるか、どちらかの運命をたどるしか道はなかったのだろう。

『スパイの妻』の撮影で垂水区塩屋の旧グッゲンハイム邸を使わせていただいた時、この素晴らしく規格外れの建物が、実にさり気なく近所の人たちの憩いの場として日常の中にたえずんでいるのを見て、ちょっと胸が熱くなった。昔はこんなだったよなあ。よくぞバブルも震災も乗り越えて、廃墟にも重要文化財にもならずここにこうして生きてくれたものだ。窓枠も壁の厚

みも天井の高さも、何から何まで普通の家じゃない。でも、出鱈目では決してなく、日本人は思いもつかない高尚な理論と美意識で自信に満ちて構築されている。実際あの家に住んだら大変なんだろうが、ほんの数日間、あそこで時を過ごす贅沢を経験できたことがこの上ない幸せだった。

人間ってつくづく勝手な生き物だと思う。僕だって自分の住む家は厳格な規格をクリアしたところでないかと嫌だ。でもふと、街を歩いていて規格外れに出くわすと、決まってワクワク胸が高鳴るのである。

くろさわ・きよし 映画監督。1955年、兵庫県神戸市生まれ。立教大学在学中より8ミリ映画を撮り始める。長谷川和彦、相米慎二に師事した後、商業映画に進出。97年の『CURE』で世界的に注目され、2000年の『回路』で第54回カンヌ国際映画祭国際批評家連盟賞を受賞。その後も08年の『トウキョウソナタ』で同映画祭の「ある視点」部門審査員賞、14年の『岸辺の旅』では同部門監督賞を受賞。20年に公開された『スパイの妻』は第77回ヴェネチア国際映画祭での銀獅子賞を受賞した。

